復刻版

家庭科学研究所機関誌

家庭科学

食物・住居・育児・家事・医事・被服から作法・娯楽まで——
戦時下の日本人の生活文化を科学的に解明・啓発した研究雑誌！

全十二巻・別冊一

戦前編（一九三四～四四年）

揃定価＝二一一、〇〇〇円＋税

不二出版

◎復刻の辞

十五年戦争下、家庭生活を国家の基礎として重視した政府は、伝統に固執するばかりでなく、家庭の科学化をめざし、大日本聯合婦人会と大日本聯合女子青年団の合同施設として家庭科学研究所を創設した。

本誌はその機関誌として創刊され、生活科学のすべての分野を網羅した研究を記録したものである。本誌は単なる教訓的な啓発雑誌ではなく、家事全般についてのかなり高度な研究雑誌であり、食物・洗濯・住居・家計・育児・医事・教育・作法・娯楽のほか農村などでの家庭外の女性の仕事までひろく対象としている。

また執筆陣には、女子教育のオーソリティのみならず東京帝国大学や東工大・慶応・早稲田のほか衛生試験所や文部省の社会教育局などのそうそうたる研究者が顔を揃えている。戦時色が濃くなるなか、本誌は国民更生運動とも連動して刊行を続け、「女子動員と家庭生活」「女子挺身隊の保健問題」「玄米食と栄養の問題」など「銃後」の生活と密着した問題も多く取り上げた。家庭生活の科学化・合理化を探究した本誌を通覧することで戦時下の日本人の生活及び生活観の変遷を目の当たりにすることができ、その復刻の意義は大きい。

ひろく家政史のみならず、女性史・生活史研究及び近代史研究に貴重な資料として復刻するものである。並行して刊行された同研究所のニュースレター『家庭科学時報』『家庭科学月報』も合わせて復刻する。

◎主な執筆者

青木誠四郎　有本邦太郎　生田花世　石田はる　石原憲治　市川房枝　井上秀子　上田柳子
氏家寿子　牛込ちゑ　大江スミ　大妻コタカ　大浜英子　香川綾　河口愛子　木内キヤウ　岸田国士
倉沢剛　黒田米子　今和次郎　柴谷邦子　清水幾太郎　城夏子　杉本好一　住江金之　高野六郎
竹内茂代　田宮猛雄　丹下ウメ　月田寛　暉峻義等　友安亮一　内藤寿七郎　永井潜　新居格
沼畑金四郎　福田邦三　別所秀子　帆足みゆき　前田若尾　三輪田元道　村上秀子　村田金兵衛
本山荻舟　柳宗悦　山川朱実　吉岡弥生

▶一九三五年、日本女子大学校家政科学生たちの工作室での製作風景

◎推せんの言葉〈五十音順〉

家庭生活の中での「科学」の変遷をたどる

高橋信孝

この度、家庭科学研究所の機関誌として一九三四年から刊行された『家庭科学』の復刻版（戦前編一九三四～一九四四年）が出版されることになりました。一九三四年というと、私が四歳の子供の頃に当り、その当時、すでに「家庭科学」という概念が芽生え、しかもそれに関する専門誌が刊行されていたことは、私にとって驚きでありました。

この雑誌が刊行されてから、私共は戦争という一大事件に直面し、また戦後の苦難を乗り越えてきました。そして、今や、家庭生活の中に、情報科学の花形であるコンピューター・サイエンスや、生命科学を基礎におくバイオテクノロジー等の新しい科学技術が急速に導入されてきております。この間に生じた家庭生活の中での科学の位置づけや価値観の変化等を、この復刻版によって追うことができることは、大変興味深いものがあります。

現代社会では専門雑誌の刊行等にコンピューターを中心とした新技術が導入され、編集や印刷の面で大きな発展と変革がもたらされている反面、古い雑誌を実際に手にとって読むといった習慣が私共に著しく欠けてきているように思われます。今回の出版が、家庭生活における科学の位置づけの歴史的変化を検証するだけでなく、古い書物をあらためて手にして読む機会を私共に与える意味において、大変意義深いものがあると確信しております。

（たかはしのぶたか　東京大学名誉教授・元日本農学会会長）

社会を見据える拠点としての「家庭」を提起した雑誌

吉川弘之

私たちは、ともすれば「家庭」という言葉から切りとられた空間をイメージし勝ちである。家庭内の教育、家庭での生活、そして家庭を飾るインテリア、家庭を楽しくする食事などの表現からは、家庭が社会から隔絶した空間あるいは外部の危険や厳しさから身を護るシェルターを意味しているような感じを受ける。しかしこのような受け取り方は余りに一面的である。実は家庭が社会を構成する基本要素なのであり、個人は家庭を私的なものと実感することの対極としてのみ公共的なものを感受する能力を獲得するということを、最近の私たちは忘れてしまったようである。

このような時代に、『家庭科学』の復刻は大きな意義がある。そこでの家庭は、切り取られた私秘的な空間ではなく、当時の変動する社会を、そこから見据える拠点として、しかし固着するのではなく最適な視点を提供する柔軟な拠点として動的な定義を与えられている。おそらくこのことは、多くの理由で家庭の重要性を改めて考えることの必要性を感じている現代の私たちに、限りない示唆と、行動への勇気を与えてくれるであろう。『家庭科学』の復刻は、私たちへの大きな贈り物であると思われる。

（よしかわひろゆき　元日本学術会議会長・放送大学学長）

家政学の未来を探るために

丹羽雅子

今から六五年前、一九三四年に故井上秀子日本女子大学校長が所長を兼務された「家庭科学研究所」において、その機関誌として『家庭科学』が創刊された。その巻頭言では、国内外において、「社会生活の基礎を家庭に」、そして「人間生活の精神的約契を家庭に求めよ」という理由から「家庭に帰れ」と主張している。また、当時から、時代とともに推移すべき家庭の構造と機能を看過できず、家庭に対し学問的研究を行い、家庭生活向上の指針を示すことを主張された。

奈良女子大学付属図書館においても、この季刊研究誌を所蔵しており、現在も学部や大学院で、特に人間文化研究科複合科学領域の教育・研究に活用されている。

創刊当時は、最も気力が充実し、理念に燃え、その存在意義を明確に主張するのが普通であり、本誌においてもそれらをうかがい知ることができる。この復刻版から初期の家政学の背景やそれと関連した事象を知り、現在の家政学の在り方や、将来への方向を探る大切な手だてとしたいものである。

近代科学の方法は物事の細分化とその原理の追求にあり、家政学もこの方向を指向してきたきらいがあるが、これからは初期の目標に回帰して、統合的視点から研究する総合化への努力が必要である。

家政学が次世紀の学問としてさらなる発展を目指すためには、学際領域としての特長をフルに発揮しなければならない。そして、質の高い、人文・社会・自然科学を融合した学問領域の構築のための貴重な資料として、本復刻版が有用されることを期待している。

（にわまさこ　元奈良女子大学学長）

理論の実践化、実践の理論化

宮本美沙子

この度『家庭科学』の戦前期のものが『家庭科学時報』『家庭科学月報』と併せて復刻されるという。早速その「総目次」ならびに論文のごく一部ではあるが内容を拝見した。今から半世紀以上も前のものであるために、時代的背景を斟酌する必要はある。しかし、その領域は衣食住ばかりでなく教育・医学・農村問題・趣味にまで及び、理論的かつ実践的な内容を含み、かなり高度な科学雑誌であり、またその執筆者も当時の先端的な研究者を網羅している点で感心した。

かつてレヴィンという心理学者が、最も理論的なものは最も実践的なものである、と言った。真の科学性とは、このようなことを言うのだと思う。ところがしばしば、実践的なアプローチに対して科学性に欠けるとし、理論に乏しいかのように非難するものがいる。家庭科学は、文字通り実践によりその理論が実証されるものである。理論と実践とは補い合いながら、学問をより高度な体系に育てることを可能にする。したがって理論と実践とは、この両者を「と」によりつなぐのではなく、「の」によりつなぐことが求められる。すなわち、「理論の実践化」であり、「実践の理論化」でなければならない。

この復刻版により、今日の家庭科学の理論の実践化、実践の理論化に、貴重な手掛かりが与えられるものと期待するところである。

（みやもとみさこ　元日本女子大学学長）

◎関連図書のご案内〔復刻版〕

文化普及会　発行
森本厚吉　主宰

文化生活

全17巻・別冊1
別冊＝解説（石川寛子）・総目次・索引
〈別冊のみ分売可＝2,000円＋税〉
A5判・上製・総7,822頁
揃定価255,000円＋税
'97年6月～'98年1月配本完結

森本厚吉が、有島武郎・吉野作造とともに文化生活研究会を発足させたのは、一九二〇年五月。それから約一〇年間にわたって森本はアメリカ合衆国留学時代から構想していた文化生活運動を繰り広げた。一貫したプラグマティストである森本厚吉は、文化生活運動をより具体的に実践するために文化生活研究会と分かれ、一九二三年、文化普及会を設立する。そして文化アパートメントを建設（一九二五年）、一九二七年には教育機関としての女子文化高等学院も創立した。

本誌『文化生活』は、森本の実践機関＝文化普及会の機関誌として創刊されたもので、文化生活研究会発行の機関誌名をそのまま踏襲した。

本誌は、文化生活運動という社会教育運動・生活改善運動を積極的に推進した森本厚吉と彼を支援する多くの文化人たちの思想とその実践のありさまをつぶさに知る好資料である。そのテーマは女性の経済的自立・産児調節など一九二〇年代に女性たちが向かい合った具体的な問題ばかりである。

本誌は、大正デモクラシー期社会運動の一面を体現する重要資料であるばかりでなく、都市生活者である女性に向けた啓発雑誌として、日本近代思想史・女性史・家政学・住居学・生活科学などの研究に大きく寄与するものである。

●推薦＝小川信子＋佐藤全弘＋ヘンリー・スミス＋西川祐子

内容見本

〔復刻版〕

家庭科学

戦前編

一九三四年～一九四四年
全十二巻・別冊一
菊判・B5判（第10巻のみ）上製　総六六七二ページ
揃定価＝二一一、〇〇〇円＋税

◎

解説＝竹中はる子（元家庭科学研究所所長・日本女子大学名誉教授）
推薦＝高橋信孝＋丹羽雅子＋宮本美沙子＋吉川弘之

◎

配本概要

第1巻　「家庭科学」第一～三輯　一九三四年一〇月・三五年三・六月
第2巻　「家庭科学」第四～六輯　一九三五年一一月・三六年一・五月
第3巻　「家庭科学」第七～一〇輯　一九三六年一〇・一二月・三七年六・一〇月
第4巻　「家庭科学」第一一～一五輯　一九三八年三・六・一一月・三九年二・五月
●第一回配本●一九九九年五月刊行●揃定価＝七〇、〇〇〇円＋税　ISBN4-8350-2266-1

第5巻　「家庭科学」第一六～一九輯　一九三九年九・一二月・四〇年七・一二月
第6巻　「家庭科学」第六六～七二号　一九四一年一〇月～四二年四月
第7巻　「家庭科学」第七三～八〇号　一九四二年五月～一二月
第8巻　「家庭科学」第八一～八八号　一九四三年一月～八月
●第二回配本●一九九九年九月刊行●揃定価＝七〇、〇〇〇円＋税　ISBN4-8350-2271-8

第9巻　「家庭科学」第八九～一〇一号　一九四三年九月～四四年一二月
第10巻　「家庭科学時報」第一～四五号　一九三六年四月～三九年一二月
第11巻　「家庭科学月報」第四六～五四号　一九四〇年一月～九月
第12巻　「家庭科学月報」第五五～六四号　一九四〇年一〇月～四一年七月
別冊　解説・総目次・索引（分売可＝一〇〇〇円＋税）
●第三回配本●一九九九年一二月刊行●揃定価＝七一、〇〇〇円＋税　ISBN4-8350-2276-9

◀『家庭科学』

◀『家庭科学月報』

◀『家庭科学時報』

収録雑誌について
本復刻は、家庭科学研究所の研究機関誌『家庭科学』の戦前に刊行されたものとあわせ、並行して出版された同研究所のニュースレター『家庭科学時報』と改題誌『家庭科学月報』を収録します。

●表示価格は全て税別

不二出版（株）
〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12
電話（03）3812-4433
ファクシミリ（03）3812-4464
振替00160-2-94084

一九九九・四（二〇〇五・七改）

家庭科學　第一輯　目次

研究・論説

叱嗔の態様とその反應との關係（子女教養の一資料として）……青木誠四郎…（二）
家庭統制の上から見た家族制度の研究……大濱英子…（三三）
家庭で教へる作法世のお母様方へ……岡野初…（六二）
農村民の主な病氣……竹内茂代…（八七）
本邦女學生の月經と運動との關係……大村久榮…（一〇四）
洋服簞笥の一研究……木檜恕一…（一〇九）
住宅及家具什器手入法……柴谷邦子…（一二五）

家庭科學

職業婦人と健康問題

竹内茂代

多種多様でありまして、帝國統計年鑑の勞働にも亦高級の精神勞働にも漏れなく〻若い方々のために、特に婦人の職業と勤め」と稱して、家を離れて働くといふかしつ〻全身を働かせる自由職業と、立をする職業との二種に區別することが出